

共創の実践者が生まれるしくみ

ゼミ学生等地域貢献推進事業

三島市「デザイン×ITC×共創」による地域課題解決プロジェクト



DXに代わられるように地域現場でこれまでの社会や産業が更新されていく中、行政サービスについても行政主導から市民協働型に移行する共創の知恵が必要とされている。本プロジェクトは「共創」のあり方についての知見を蓄え、今後の事業推進を支えるしくみの開発を目的として、行政担当とNPOなど市民団体、大学研究室が共創して「デザイン×ITC×共創」の検討から始まった。

継続的に学生たちが、コミュニティの活性化を推進している三島市の方々と取材し、その行動や周囲との関係性についてデザインリサーチの手法を通してカスタマージャーニーやビジネスモデルとして可視化することで、市民の受容を促す「しくみ」を考察することとなった。

発行日：2021年3月30日
編纂・発行：常葉大学 安武研究室 / In&Out Lab (未来デザイン研究室)
静岡市南区藤名1-22-1
協力：三島市

- 1 片手で持てる小さな満足 地元名物「みしまコロッケ」
- 2 三島市民の足「いずっぱこ」
- 3 三嶋大社の歴史と人気の理由

三島市を知る8のこと

この冊子はこれまで三島で暮らした人たちの視点からできている。執筆を促された市民や学生は、知らないことも多いが、この冊子に託された三島市をよりよく知るための一助を願った。

4 川と暮らす街、三島

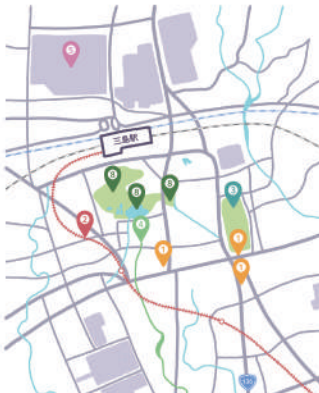
昭和30年代、瀬川川沿いをはじめとする河川沿いは、野菜や果物の産地として発展してきた。川の水を潤やかし、生活の足しと存続してきた。その流れとして河川沿いの風景も変わってきた。川の水を潤やかし、生活の足しと存続してきた。その流れとして河川沿いの風景も変わってきた。

5 化学製品を世界に発信しつつ、宿場町の名残を残すまち

三島市の人口はおよそ17万人で、静岡県内の人口割合は高い。化学製品を世界に発信しつつ、宿場町の名残を残すまち。三島市の人口はおよそ17万人で、静岡県内の人口割合は高い。

6 市民自らが水の都を築く「せせらぎ事業」

三島市では、昔と変わらない風景を残す「せせらぎ事業」。市民自らが水の都を築く「せせらぎ事業」。三島市では、昔と変わらない風景を残す「せせらぎ事業」。



7 湧水が豊富な理由

三島市の湧水は、お天の恵みと地質のおかげ。湧水が豊富な理由。三島市の湧水は、お天の恵みと地質のおかげ。

8 子供にも大人にもなる水に因んだ街

水辺には子供も大人も楽しめる水に因んだ街。水に因んだ街。水辺には子供も大人も楽しめる水に因んだ街。

三島市 × 常葉大学安武研究室 / In&Out Lab

ゼミ学生等地域貢献推進事業

地域課題解決プロジェクトについて

1. 概要

・背景

三島市は「人口減少によって三島市を主体的に盛り出す人がいなくなっている」「コミュニティ同士の繋がりがない」といった課題を抱えています。市民が「自分たちも創造する人」に変容するには、本人の行動や周囲との関係性など重要な要素があります。本プロジェクトは、行政のサービス設計に貢献して、これまでの行政主導から市民協働型に移行するための、「共創」のあり方についての知見を蓄え、今後の事業推進のプロセスに具体的に組み込むようなプログラムやフォーマットを開発することを目的として進められました。

2. プロセス

① 課題の把握 (9月のワークショップ)

オンラインワークショップを兼ねた後、三島市を元気にしようとする活動している行政や市民の方々と、Code for 三島に、大学生たちが三島がいかに活気にあふれているかを共有するワークショップを開催しました。ワークショップを通じて、市民生活への参加意欲が高まるしくみなどについて実現の可能性を話し合いました。本プロジェクトの方向性が決まりました。

② 調査設計

実践者たちを調査する目的で取材シートを設計しました。Ver.1として、両側に由来を整理できるジャーナリズム「インタビュー」を考えた。しかし、ユーザーとしての「行動」と感情が分断されているため関係性が見つけにくい。「取材シート」を整理する役割が明確でなく、「インタビュー」を見つけた。改良したシート Ver.2では、多面的な繋がりを見つけやすいビジネス型を採用しました。

③ デザインリサーチの手法を用いた分析

三島市民の人生体験を体系化するためのカスタマージャーニーマップ¹⁾実践者を事業型と捉えてビジネスモデルを作る「リーンキャンパス²⁾」市民の理想や期待を可視化する「パブリックプロポジションキャンパス³⁾」の3種類の分析手法を使い、実践者が変化したメカニズムを見つけてきた。

・プロジェクトの目的

三島市に住む人たちが自らアクションを起こし、主体的に三島の価値を上げていくためのメカニズム (必要なきかけや要素、本人以外のさまざまな当事者との関係性) を明らかにすることを目的とします。これにより、より多くの市民が三島市の価値を創造する当事者に変容することが期待できます。

*1 ビジネスモデル・ユーザーに価値を提供する上で利益を上げる活動の仕組みのこと

1) ジャーナリズム「インタビュー」を考えた。しかし、ユーザーとしての「行動」と感情が分断されているため関係性が見つけにくい。「取材シート」を整理する役割が明確でなく、「インタビュー」を見つけた。改良したシート Ver.2では、多面的な繋がりを見つけやすいビジネス型を採用しました。

2) ビジネスモデルを作る「リーンキャンパス」市民の理想や期待を可視化する「パブリックプロポジションキャンパス」の3種類の分析手法を使い、実践者が変化したメカニズムを見つけてきた。

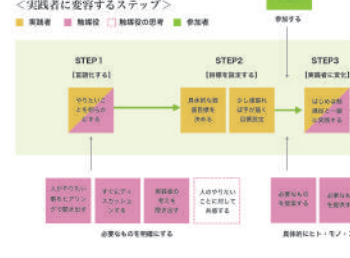
3) 実践者を事業型と捉えてビジネスモデルを作る「リーンキャンパス」市民の理想や期待を可視化する「パブリックプロポジションキャンパス」の3種類の分析手法を使い、実践者が変化したメカニズムを見つけてきた。

私たちの考察

1 《図解》実践者に変容するステップ

ジャーナリズムとリーンキャンパスからヒントを得た「実践者たちの新しい体験」を選び出し、価値や関係性を考えた変容を生み出す「しくみ」を、下の表のステップで整理しました。「やりたいことを自分の言葉で話す」「目標を数値化する」「振り返り会を常設する」という一連のプロセスが重要であると同時に、実践者の初心者を支えたり、行政や先人たちとつながる存在が欠かせないこととなります。人々を多面的につなげられるのは、こうした「関係」の役割になる人物であると考えられます。

一方で、主体的な活動に踏み出せない理由として、触発役と触発されない可能性が考えられます。また、自分の行為の価値を感じていないと思われる内面的な原因も存在していることもわかりました。



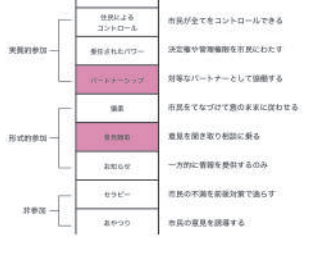
2 行政が地域を変える人々を支援するには？

私たちは、「行政は触発役として実践者を支援できる可能性がある」という結論を持ちました。触発役は身近に集まることで、アーンスタインが「住民参加の梯子」で示したように「形式的参加」から「実質的参加」に押し上げることで、行政が対等なパートナーとして協働する。触発役がなくても自主的にプロジェクトを始める状況に至ることがあります。触発役の働きかけとして注目したいのは、対等なパートナーという関係を「意見聴取」の段階から築き、実践者の初心者が立ち止まるまで続けている点です。

以下はその過程です。

- 触発役はまず「形式的参加」の場に向けて「意見聴取」を行います。例えば、定例会の参加者と飲食などの交流の場での出会い、本音を話し合える関係を築いた上で意見を聞き取ります。
- 次に「実質的参加」の実現に向けて「パートナーシップ」を築きます。例えば、常設する対等なパートナーを提供する、イベントの開催に立ち会いたいように、対等なパートナーとして協働します。
- 「やりたいことを実現するための方法を理解し、モノや人脈を得た実践者は、触発役の関わりなしでも活動を続けていきます。

シェリー・アーンスタイン「住民参加の梯子」⁴⁾



4) 著者シェリー・アーンスタイン「市民参加の梯子」『デザインのプロセス』(Sherry Arnstein 1999, "A Ladder of Citizen Participation" Journal of American Planning Association, Vol. 63, No. 4, pp. 6-16)

1) ジャーナリズム「インタビュー」を考えた。しかし、ユーザーとしての「行動」と感情が分断されているため関係性が見つけにくい。「取材シート」を整理する役割が明確でなく、「インタビュー」を見つけた。改良したシート Ver.2では、多面的な繋がりを見つけやすいビジネス型を採用しました。

2) ビジネスモデルを作る「リーンキャンパス」市民の理想や期待を可視化する「パブリックプロポジションキャンパス」の3種類の分析手法を使い、実践者が変化したメカニズムを見つけてきた。

3) 実践者を事業型と捉えてビジネスモデルを作る「リーンキャンパス」市民の理想や期待を可視化する「パブリックプロポジションキャンパス」の3種類の分析手法を使い、実践者が変化したメカニズムを見つけてきた。

